石川県立加賀高校

観点別学習状況の評価の実施

授業態度を重視した評価と少人数制クラスの導入で、生徒の学習意欲を高める

変革のステップ

背景と課題

- 定期考査を重視する従来の評価方法では、授業に真面目に取り組む生徒を公正に評価することができていなかった
- 生徒の授業への参加意欲が低かったため、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業の推進が課題だった

実践内容

- **観点別学習状況の評価を実施**　授業態度やパフォーマンス評価の規準を策定し、定期考査や提出物に加え、ルーブリックを使って、「関心・意欲・態度」も公正に評価する仕組みを構築
- **少人数制クラスを増加**　少人数制授業を行う教科・科目で、従来の３クラスを４クラスにし、教師が生徒一人ひとりの学びをより丁寧に見取れるよう体制を整えた

成果と展望

- 生徒の授業態度が変容し、授業に積極的に参加するようになった
- 「思考力・判断力・表現力」の育成の強化が、今後の課題

授業に真面目に取り組む生徒を評価できる仕組みを作りたい

２０１８年度、石川県立加賀高校は、学期ごとの成績の評価方法を改定した。従来の定期考査７割、平常点３割という比重を改め、「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」の４観点（＊）による観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）を実施し、定期考査や提出物に加え、ルーブリックを使ったパフォーマンス評価を導入することにした（図１）。

評価方法を改定した背景には、「頑張っている生徒を、公正に評価したい」という思いがあった。学び直しを必要とする生徒が多く入学してくる同校では、学びに向かう力を育成するこ

＊ 教科・科目によっては、その特性から３観点または５観点としている。

PROFILE

普通科高校として開校後、2000年度、南加賀地区唯一の総合学科高校となる。３年間を見通したきめ細かなキャリア教育を行い、生徒の進路実現を図る。２年次から、希望進路に応じた進学、生活・福祉、ビジネスの３系列を用意。

設立	1973（昭和48）年
形態	全日制／総合学科／共学
生徒数	１学年約80人
2020年度進路実績（現役のみ）	４年制大は、金城大に１人が合格。短大、専門学校進学18人。就職40人。
住所	〒922-0331　石川県加賀市動橋町ム53
電話	0761-74-5044
Web site	https://cms1.ishikawa-c.ed.jp/kagaxh/

とを重視していた。しかし、従来の評価方法では、授業に真面目に取り組んでいても、定期考査の得点が低ければ、低い評定をつけざるを得なかった。教務主任の中巳出仁美先生は、次のように語る。

「努力しても評価が低ければ、生徒はやる気を失ってしまいます。一方で、授業態度に問題があっても、定期考査で高得点を上げれば高い評価を得られます。もっと評価すべき生徒を評価できていないといったジレンマがありました」

また、同校では、これからの社会で一層必要となる主体性や協働性、コミュニケーション力

校長
桐生裕三 きりゅう・ゆうぞう
教職歴34年。同校に赴任して2年目。「学びて思わざれば則ちくらし、思いて学ばざれば則ちあやうし（孔子）」

教務主任
中巳出仁美 なかみで・さとみ
教職歴13年。同校に赴任して10年目。「生徒一人ひとりに寄り添い、かかわり、彼らの成長をともに喜び合えるように」

進路指導課
前田鷹図 まえだ・たかと
教職歴10年。同校に赴任して4年目。「誰に対しても公平であること。士別三日、即更刮目相待」

教務課
秋山拓也 あきやま・たくや
教職歴3年。同校に赴任して3年目。「学ぶことをやめたら、教えることをやめなければならない」

などを育むために、アクティブ・ラーニング（以下、AL）の視点を取り入れた授業を積極的に推進していた。しかし、従来の評価方法では、授業態度はあまり評価されないため、育成を目指す資質・能力、及びそれらを育成するための教育活動に、評価方法が対応していないといった問題があった。教務課に所属し評価方法の改定を推進した前田鷹図先生（現在は進路指導課所属）は、次のように語る。

「本校が育成を目指す資質・能力は、当時も今も変わっていません。知識の習得だけでなく、主体性や協働性などを育みたいのです。そのために、ALの視点を取り入れた授業を行おうと思っても、生徒の授業への参加意欲は低く、授業が成り立つ状況ではありませんでした。どうすれば生徒が意欲的に授業に取り組むようになるのか真剣に考えました」

教務課は17年12月、管理職と協議の上、評価方法の改定案を作成し、全教師に配布して意見を募った。すると、評価方法の煩雑さを懸念する声はあったものの、指導と評価の一体化を図るといった趣旨には、概ね賛同が得られた。そこで、18年3月の職員会議で正式に改定を提案。それが承認され、18年度に観点別評価を実施することとなった。

学習意欲の向上をねらい、「態度」の評価を重視

同校の観点別評価の特徴は、「関心・意欲・態度」を重視している点にある。成績評価は100点法とし、「関心・意欲・態度」に40点を割りあて、残りの3観点を各20点とすることを基本とした（**図1**）。授業に取り組む姿勢を公正に評価することで、生徒の学習意欲を向上させるねらいがあると、桐生裕三校長は説明する。

「学習に苦手意識を持つ生徒に、『関心や意欲を持とう』と言うだけでは無理があります。しかし、教師の話を真剣に聞いたり、クラスメートと協力しながらグループ活動に取り組

図1　観点別評価の構成

	成績判定（計100点）						
	40点（%）		20点（%）		20点（%）		20点（%）
	関心・意欲・態度		思考・判断・表現		技能		知識・理解
考査のある科目	提出物等	パフォーマンス評価	考査点	パフォーマンス評価	考査点	パフォーマンス評価	考査点（小テスト等）
	40%	60%	70%	30%	80%	20%	100%
考査のない科目	提出物等	パフォーマンス評価	パフォーマンス評価		パフォーマンス評価		パフォーマンス評価
	40%	60%	100%		100%		100%

観点別評価は上記を基準とし、詳細は、各教科・科目の特性と実情に応じて教科会で決定する。定期考査では、知識・理解に偏重せず、その他の観点を評価するための問いも出題することとした。パフォーマンス評価では、生徒にあらかじめルーブリックを提示して到達目標を明確にし、評価の透明性を保つようにしている。

＊学校資料を基に編集部で作成。

んだりするといった『態度』は、心がけ次第でよい方向に変えられます。『態度』の評価を重視することで、学びへの意欲が高まることを期待しました」

どの教師も、分かったという体験を通じて生徒の関心や意欲を引き出そうと、丁寧な説明に努め、学力に課題のある生徒にも分かりやすい授業を実践することを意識してきた。しかし、学習への苦手意識が強いために、初めから理解することを諦めてしまっている生徒がいたのが実情だった。そこで、評価の基準を明確にし、その基準に従って授業に臨めば、よい評価が得られ、やがて「真剣に授業を受けてみたら、自分でも理解できる」と気づき、学びに対する関心や意欲が高まっていくことをねらいとした。

観点別評価を適切に行うために導入したのが、ルーブリックを使ったパフォーマンス評価だ。ペーパーテストでは点数化しにくい資質・能力を測る際に、教師によって評価の軸にずれが生じないよう評価基準を設け、生徒にも到達目標が分かるようにその基準を示した。

「関心・意欲・態度」では、全教科・科目共通の「授業態度（関心・意欲・態度）の評価規準」（**図2**）を、教務課主導で作成。さらに、教科・科目ごとに、グループワークなどでパフォーマンス評価を行う際には、必ずルーブリックを作成し、生徒に示すことにした。例えば、「地理A」の授業で行う資料の読み取りでは、**図3**の評価規準を用いる。教務課の秋山拓也先生は、その手応えを次のように語る。

「授業において、何をどこまでできるようになれば評価されるのかといった基準が明確に示されたことで、それを目標として頑張れる生徒が増えました。私たちもルーブリックを生徒と一緒に見ながら、『この部分ができるようになったら、評価もBになるよ』といったように、より具体的に行動指針を示しながら声をかけられるようになりました」

評価方法を変更した意図をすべての教師が繰り返し伝える

新たな評価方法においては、例えば、「関心・意欲・態度」のパフォーマンス評価の導入により、教師の負担が大きくなることが懸念された。そこで、教務課は、表計算ソフトで「評価基準ファイル」（**図4**）を作成した。それは、生徒一人ひとりの到達度を打ち込めば、学期単位での評定が自動的に算出されるシステムだ。

「新しい評価方法の趣旨に賛同はできても、評価する作業を負担に感じては、適切な評価はできません。集計作業を効率的に行えるよう、定期考査もパフォーマンス評価も、得点や結果を入力すれば、最終的な評定が自動的に算出される仕組みとしました。これで、一度の入力は数分程度の作業で済むようにし、また、毎週の教科会で入力状況を確認することにしました」（前田先生）

生徒にも、新しい評価方法の周知と浸透を図った。年度初めのホームルームで、担任から、授業中の態度やグループワークなどの取り組み状況を重視した評価を行うことを伝え、各教科・

図2　「授業態度（関心・意欲・態度）」の評価規準

伸ばしたい力：今すべきことを考え、課題に懸命に取り組む姿勢

A	Bの規準を達成していて、それに加え ・積極的に発言することができる。 ・質問したり、調べたりして難しい発問に諦めず取り組むことができる。 ・工夫してノートやプリントを書くことができる。 ・問題解決のため、積極的に周囲とかかわることができる。
B	・先生やほかの生徒の話を静かに聞くことができる。 ・必要なことをノートに書くことができる。 ・聞かれたことに真剣に向き合うことができる。
C	Bの規準を達成できておらず、授業に対する集中力に欠ける場面が多い。
D	Cに加え、 ・授業の準備をしてこない、ずっと居眠りをしているなど、意欲が感じられない。 ・授業中に度々注意され、授業が進む妨げになる。

欠席はE評価となる。＊学校資料を基に編集部で作成。

図3　資料の読み取り活動の評価規準

伸ばしたい力：資料を読み取る技能
評価対象：資料を正しく読み取る

A	資料から発問の解答に関連する事柄を、正確に読み取ることができる。
B	発問の解答にはつながっていないが、資料を正しく読み取ることができる。
C	正しく読み取ることはできていないが、資料を読み取ろうと努力している。
D	諦めてしまって、資料を読み取ろうという努力が見られない。
E	授業欠課

＊学校資料を基に編集部で作成。

科目でも、初回の授業で同様の説明をした。すべての教師が、同じ内容を生徒に伝えることで、徹底的に意識づけを図った。加えて、教室の黒板の横には、常に生徒の目につくように、「授業態度（関心・意欲・態度）の評価規準」を貼った。

『なぜ、評価方法を変えたのか』と質問してきた生徒には、『君たちが社会に出た時に必要となる力を育成するためだよ』と答えました。本校の生徒の大半は、卒業後すぐに就職します。授業中に教師の話をしっかり聞く姿勢や、グループワークでクラスメートと協力しながら問題解決に取り組む態度などは、社会に出てからも求められます。生徒には、『そうした態度は、基礎学力と同じぐらい大切だよ』と、発信し続けました」（中巳出先生）

図4　「評価基準ファイル」のフォーマット

横軸は評価項目、縦軸は出席番号順に並んだ生徒。得点や観点別評価の結果（A～D）を入力すれば、学期単位での評定が自動的に算出される。
＊学校資料をそのまま掲載。

「変化の年」と勝負をかけ、少人数制クラスを増やす

新しい評価方法を導入するとともに、少人数制授業を行う教科・科目では、従来の3クラスを4クラスに増やした。1クラスあたりの生徒数を減らしたことで、教師は生徒一人ひとりの学びの様子をより丁寧に見取ることが可能になり、多くの生徒が落ち着いて授業に取り組むようになった。

「クラス数を増やしたことで、教師1人あたりの担当授業時数は増えましたが、授業の雰囲気をよくしたいといった思いを、教師は皆、抱いていました。そのため、学級数の変更も、快く賛同してくれました」（中巳出先生）

「新しい評価方法を導入する18年度は、学校と生徒を変える勝負の年になる」と改革を推進した結果、年度内で多くの生徒の授業に臨む姿勢が変わった。「努力しても無駄」と諦めていた生徒たちが、「テストの得点はよくないけれど、授業中の『態度』が評価されるのであれば、何とかなりそうだ。それに社会に出た時にも評価されることであるのなら、頑張ろう」と、授業態度を意識するようになったのだ。

「保護者から、『これまでは、「何でこんな成績なの？」としか子どもに言えませんでしたが、今は、○○をよくすれば成績が上がるから頑張って」と言えます』と、うれしそうに言われることもあります。評価の対象に態度を加え、評価の基準を明確にしたことで、成績について、保護者も生徒に声をかけやすくなったのだと思います」（中巳出先生）

自分の行動を振り返り、自己分析できる力を育みたい

同校の観点別評価は、今年度で3年目を迎えた。生徒には、ルーブリックで示された目標に向かって努力する力は確実についてきた。ただ、それによって自分がどのように成長し、今後の課題が何かを自身で分析して次の目標を設定する力は、まだ不足している。そこで20年度から、生徒にアンケート調査を実施し、それを自身の行動や成長についての振り返りの機会にさせる取り組みを行うことを検討している。

桐生校長は、今後の展望を次のように語る。

「本校では、『関心・意欲・態度』については、指導方法や評価方法が確立され、一定の成果も出ています。次は、『思考力・判断力・表現力』を伸ばす段階にあると考えています。その3つの資質・能力を、生徒にどのレベルまで育成することを目指すのか。その評価をどのようにルーブリックに落とし込んでいくのか。そして、3つの資質・能力を育成するために不可欠となる教師の授業力の向上をどう図っていくのか。それらの課題に今後は取り組んでいきます」